

「教育心理学」授業公開について

中 本 敬 子
(教育学部専任講師)

1. 科目名、公開日時など

公開した授業は、教育学部学校教育課程の必修科目（1年次）の「教育心理学」である。公開日時は12月11日（木）5限、教室は通常通り12号館12101教室（階段型大教室）であった。履修者は全部で130名であり、この日の出席者は120であった。

2. 科目全体のねらい、シラバス等

この科目は多くの受講生にとって初めて心理学に触れる機会となるため、心理学的な観点から、教育や子どもの発達を捉えていくための基礎知識や考え方を講義形式で身につけることを目的としている。シラバスは表1の通りである。

表1. 「教育心理学」シラバス

授業概要
子どもは学校生活を通して、様々な知識を獲得し、学習への意欲を高め、社会性を身につけ、成長していく。教育心理学は、そのような教育実践を支援するために役に立つ知見や方法、技術を提供する。前半は、人はどのような条件でどんな風に物事を「知っている、分かる」ようになっていくのか、子どもはどのような過程を経て発達していくのかといったように、学習、発達に重点をおいて進めていく。後半は、個性・個人差を考慮しながら教えること、学級という集団の特性と教師の役割などについて学んでいく。
授業計画
教育心理学とは何か 知識の獲得過程（1）記憶の仕組み 知識の獲得過程（2）様々な知識と問題解決 知識の獲得過程（3）学習理論から見た学びの仕組み 知識の獲得過程（4）学習の動機づけ 発達のメカニズム（1）発達の捉え方 発達のメカニズム（2）知能の発達 発達のメカニズム（3）人間関係と人格の発達 教授方法と個性・個人差（1）様々な教授方法 教授方法と個性・個人差（2）個性・個人差を生かした教育 学級という社会の特性（1）子どもの人間関係 学級という社会の特性（2）教師と子どもとの関わり 軽度発達障害と指導上の配慮
評価方法
小テスト（3回程度）、授業末に提出する感想カード（出席チェックを兼ねる）、期末テストによって総合的に評価する。

3. 公開した授業のねらい、内容

公開した授業は、「学級という社会」というタイトルで、前回の授業から引き続き、教師と児童・生徒間の関係や児童・生徒同士の社会的相互作用についての基礎的事項を理解させることが狙いであった。授業はおおむね下記の内容で構成されていた。

- 16:20～16:35 小テストの実施
- 16:35～16:45 今回使用するプリントとリアクション・ペーパーの配布
前回のリアクション・ペーパーへの回答と前回の復習
- 16:45～17:45 講義（集団規範と同調行動、集団の構造を把握する手法）
- 17:45～17:50 リアクション・ペーパーの記入・回収

4. 特に見てほしかったところ

公開授業ではあったが、通常の授業と異なることは何も行っていない。ただ、この科目は、履修者数が多いこと、講義中心であること、心理学という大学に入ってから初めて接する学問領域であること等を考慮し、下記のような工夫を行っている。

① パワーポイントの利用とレジュメの配布

授業はパワーポイントを使用して行っている。教育心理学の講義では、実験や調査の結果などを示すことも多く、図表などを視覚的に呈示したいためである。また、講義で取り扱う内容が多岐にわたるため、授業の速度を上げたいという理由もある。また、パワーポイントのハンドアウトはすべて受講生に配布しており、受講生には口頭での説明をプリントやノートに書き込むように指示している。また、授業で使ったパワーポイントのファイルは学内のネットワークドライブにアップロードし、受講生が随時入手できるようにしている。

② リアクション・ペーパーの活用

出席確認もかねて、リアクション・ペーパーへの記入を求めている。使用しているのは、B6 罫線入りの用紙である。リアクション・ペーパーへの記入は必須ではなく、白紙での提出も認めているが、毎回何も書かずに提出する受講生はあまり多くはない。リアクション・ペーパーに書かれた質問などは、次回の授業のはじめに取り上げて答えるようにしている。大教室での授業は教員からの一方向になりがちだが、リアクション・ペーパーによって双方向性を保つことができている。また、授業の最初にコメントを返すことによって、前回授業の復習を兼ねることもできる。

③ ゲーム的要素の取り入れ

5 限、大教室、講義科目という条件もあるため、ともすると受講生の集中力が

とぎれがちになるため、ゲーム的な要素を取り入れる工夫を行っている。たとえば、記憶の仕組みについての回では数字や人名をいくつ覚えられるかを実際に試してみたり、達成動機や自我同一性地位についての質問紙に回答させたりといったことである。

④ 小テストの実施

本科目では、学期中に 3 回程度の小テストを実施している。小テストは、授業開始時に 12 分程度で解答可能な量であり、すべて客観式のテスト項目（正誤問題ならびに空所補充問題）で構成されている。小テスト受験時には、自筆ノートやプリントなどの持ち込みを許可している。小テスト実施のねらいとして、それまでに授業で取り上げた事柄について基本的な事項が理解できているかどうかを確認することだけでなく、学生がノートやプリント等を整える機会になることがある。本授業では授業で使用しているパワーポイントのスライドをプリントとして配布していることから、それでテストへの対応が十分と考え、受講態度に熱意が見られなかったり、ノートをあまりとらない学生が見受けられる。しかし、パワーポイントの資料をその場で読むだけでは解答できないように小テストを構成し、結果をフィードバックすることで、学生自身が自らの受講態度を見直したりノート取りの必要性を実感したりする機会を与えることができると考えている。

5. 授業についての自評

リアクション・ペーパーの記述内容から考えると、本授業に関しては、同調行動の性質やソシオメトリなどの基本概念を理解させ、さらに学級経営などに関連づけて考えさせることに、それなりに成功したのではないかと考えられる。しかし、ペーパーへの書き込みが非常に少なく授業に興味を持てなかったと考えられる者や基本概念をやや誤解していると思われる者がいたため、次回の振り返り時にフォローする必要があった。また、資料等の配布に手間取ってしまい授業がだれた場面のあったことや、私語をする学生への注意が必ずしも適切でなかったこと等の反省点もあった。

6. 授業公開についてのコメント

多くの場合、大学教員は、教員としての訓練を受けることなく教壇に立つ。以前に比べれば、FD に関するシンポジウムやワークショップなどが盛んに開催されるようになってきているとは言え、自分以外の教員が実際の授業を行っているところを見る機会はさほど多くはない。そのため、自分が大学生だった頃に受けた授業を思い出し

つつ、他者の話から得た着想や我流の工夫を試行錯誤しながら取り入れて授業を作っているというのが現状なのではないだろうか（少なくとも著者はそうである）。そんな中、限られた期間・限られた授業とはいえ、本学部で授業公開を行ったことは価値のあることであったと思われる。

他の教員の授業を参観することによって期待できるのは、大きく分けて授業の内容に関するものと授業方法に関するものに分けられるだろう。前者に関しては、初年次教育科目等のように取り扱うべき内容自体を模索しながら授業を構築している段階で特に必要とされるものであり、実際に他の教員の授業を見ることはもちろん参考にはなるが、それ以上に既に同趣旨の授業を実施している他学部や他大学から情報を得ていくことが大切になろう。

後者に関しては、授業を参観することで資料の配付方法、出席の取り方、学生の理解度の評価方法、学生の集中力の保たせ方などに関する他教員の工夫を知ることができると考えられる。もちろん、授業の方法に関する情報を得る手段は、公開授業の参観だけではない。たとえば、池田他(2001)や杉江他(2004)等の書籍や、「授業をどうする！」の原著者の一人 Davis, G. B. のホームページ(<http://teaching.berkeley.edu/bgd/>)には、授業デザインに関する具体的な工夫や実際の事例が数多く掲載されており参考になる。しかし、実際にどんな授業が良い授業であるかは、学生の気質や授業の規模に依存する部分が大きいため、同じ学部には所属する教員の授業から得られる情報は非常に有意義なのではないだろうか。

最後に、FD 活動に関する私見を述べる。授業公開を含めて、FD 活動を推進することは非常に重要である。しかし、FD の根本にあるのは、「より良い大学教育を達成すること」であろうし、そのためには、大学教育とは何か、どうあるべきなのかに関して、大学や学部全体で考えを深めていく必要があるように思われる。大学のあり方が問われている今、本学でも授業テクニックの交換に留まらない FD 活動が行われることを期待する。

参考文献

- Davis, G. B., Wood, L., & Wilson, R. C. (1983). A Berkeley Compendium of Suggestions for Teaching with Excellence. University of California, Berkeley (香取 草之助 (監訳) (1995). 授業をどうする！—カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集 東海大学出版会)
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001). 成長するティップス先生：授業デザインのための秘訣集 玉川大学出版部
- 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ (2004). 大学授業を活性化する方法 玉川大学出版部